

子ども会（学習会）だより

MY SKY No. 27



1997年12月9日火曜日発行(毎週火曜日きまぐれ発行)

発行者

板野中学校

学習会

編集・文責：吉成正士

先日、2年生でクリーン大作戦が実施されました。先だって行われた全体学習資料「木を植えた男」でつかんだ「思い」を、「実践」へとつなげた大きな、そして貴重な一歩だったと思います。

『心根』というものは、環境によって大なり小なり影響を受ける。

だから、身の回りの環境を美しくしていくことは、今の中学生にとってすごく大切という提案のもと行われたのだそうですが、学校周辺から健康の館にいたる範囲のキャン・ピンを、町指定のゴミ袋で分別収集し、15袋にもなったそうです。学年全員でやると、こんなにも集められるんですね。また、こんなにも捨ててる人がいるんですね……残念です。それにしてもこの冬の最中ですから、決して楽には拾えなかったと思いますが、それでもがんばっていたようで、中には川に入らずぶぬれになってまでも拾い集めていた子もいたそうです。本当に頭がさがる思いです。きっと、風は冷たくても心はあったかかったんでしょね！このように「身の回り」から「町全体」を美しくしようという「思い」や「実践」は、きっとこれからの時代を作り上げていく大きな力となるはずですよ。折しも京都では地球温暖化防止会議が行われています。環境問題は、これからの地球を考える上で人権問題と並び最大の問題ともいわれています。この実践を通して同会議へエールを送るとともに、これからもこの「気持ちいい」気持ちを、大切にしたいものですね。

なお集められたキャン・ピンの行方ですが、鶴岡先生が自ら、引き取り業者に持って行ってくれたそうです。すごい！！



☆ 第49回全国同和教育研究大会開催！！(11月29日～12月1日：熊本県)

前週は全同研の関係でお休みにしました。今年も残すところ本号と次号のみとなりましたが、この2回で、参加者の感想を紹介したいと思います。どうぞご覧ください。

☆☆☆ ★★★★★ ☆☆☆ ☆☆☆

全同研に参加して

学習会専任指導員 坂東千恵子

私は初めて全同研に参加しました。初日の全体会に行って驚きました。理由は参加人数

の多さでした。「部落差別解消に向けて立ち上がっている先生や関係者の人は、こんなにようけおるんやなあ。うちの生徒たちに見せたいなあ。」と感じました。あれだけの人数を見たら、すごく元気になってきて、「私もがんばらなあかなあ」と励まされました。分科会は「進路保障」に参加して、研修を受けました。「進路保障は同和教育の総和である」と言われます。その進路保障をしていくためには、日々の授業、日々の学習をキッチリとしていき、生徒が主体的に生き生きとできて、全員の生徒がわかる授業、また仲間づくりを意識した授業をしていくことだと感じました。私の専門教科は数学なのですが、吉成先生も同じ数学ということもあり、数学の授業で同和教育を中核に据えた授業とはどんなものかということについて話し合う機会がありました。吉成先生は、私の質問に真剣に答えてくださり、すごく勉強になったし、嬉しかったし、来年度から数学の教諭として教壇に立って、吉成先生と話し合ったような授業をすることができるんだと思うと、涙が出てきました。それと同時に、絶対やってやるぞという意欲が湧いてきました。また、道徳や学級活動、部活動に関しても、生徒と共に学び、楽しみ、成長でき、仲間づくりを意識した実践をしていこうと考えています。

全同研、久留米市同和教育研究協議会の方々との交流に参加できて、いろいろ勉強させていただきました。その上、元気と意欲をもらった5日間でした。今のこの熱い気持ちを忘れることなく、充実した毎日を送っていきたくて考えています。

★☆☆ ★★★ ☆☆☆☆ ★★★★★ ☆☆☆

第49回全国同和教育研究大会に参加して 同和教育主事 阿部 憲作

初めて全同研に参加したのがもう10年も前になりますが、その時、感動したというか驚いたのは人の多さとその熱気でした。それは10年を経た今大会でも全く変わりませんでした。

全同研大会のよさというか、おもしろさというのは一言で表すと「出会いがある」ことだと思います。今大会でもたくさんのお会いがありました。

全同研に出発した一日目、本校の森口先生が熊本県の黒木さんという方と縁あって、その黒木さんの勤めている二岡中学校の保護者のみなさんに講演をする機会がありました。ここでは詳しく伝えきれませんが、黒木さんをはじめ、保護者のみなさんの誠実さが私たちに伝わってくるようで、とてもさわやかな気持ちになりました。

2日目はいよいよ全同研本番の始まりです。2万数千の方々が続々と会場に集まってきます。屋近くには全体会場の「パークドーム熊本」は歩くのも困難なほどに人、人、人で

す。顔馴染みの方もいれば全同研でしか会わない方と一年ぶりの再会をします。しかし不思議なことに一年ぶりだという感覚が全くありません。遠くにいてもすごく近いという感覚なのです。きっとみんな同じ目標を持っているからだと思います。

2日目の夜は、全国各地から集まってきた約70名の方との交流会です。同和教育の活動状況について情報交換をします。私にとっては最も元気の出る会です。厳しい部落差別の現状や同和教育の進まない状況にあっても、決して屈せずたくましく生き抜いている人たちの話は、本当に豊かでおもしろいのです。

2日目の午後と3日目は分科会でした。いわゆる大人たちの全体学習のようなものです。はじめに、ある地域や学校の取り組みが報告され、それを中心にして話し合いを深めていきます。本音がぶつかり合ったり、共感し合ったり心がさまざまに揺れ動く大人たちのステキな学習時間が繰り返されました。

4日目は福岡県の久留米市同和教育研究協議会の先生方と交流学習会を持たせていただきました。本当に有意義な出会いでした。同和教育への取り組みのすばらしさは言うまでもなく、仕事を共にしてみたいと思うようなステキな人たちでした。

今回の全同研をとおして「こんな取り組みをうちでもやってみたい、こんな学習をみんなと共してみたい」と頭の中にいろんなことが浮かんできました。さまざまな展望と夢を創造させてもらえた4日間でした。また、同和教育を中心にして人権文化を創造していく取り組みは、確実に全国各地でうねりをあげていることを肌で感じとることができました。地球温暖化防止国際会議が京都で開かれています。今まさに人類共通の課題として人権文化を創造していく時代であると感じます。全同研はその役割の一端を担ってきたすばらしい大会なのだということを改めて感じることができました。



全同研への道中、私は3年前のことを思い出しました。

ちょうど3年前の11月、全同研が徳島の地で開催されたのですが、その開会式の前日(11月25日)、板野中学校で全体学習を行いました。口コミで全国各地から約400人もの方々に参加していただき、そのまな中で全体学習をすることができました。もう当時のことを知っている先生方も数名となってしまう、懐かしい思い出となりつつあるのですが・・・。(当時のことは「1994年度峰を越えて」「いしづえ」に記録しており、学校や町の図書館にも蔵書しています)

その時に学んだのが、丸岡忠雄さんの「ふるさと」という詩でした。実はこの詩に関わって、幾つかの秘話があります。その1つを少し紹介したいと思います。

その全体学習当日からさかのぼること2週間前の日曜日、私はたまたまひまができたので、思い立ったように丸岡さんの故郷へ車を走らせました。といっても、それまでに行っただけで、それ以外はほとんど知りませんでした。つまり、すごくいい加減に、あてずっぽに出発したのです。普通はこんなことしませんよね。でも「ふるさと」を学習する中で、祖父母について、友について、生きるということについて、結婚について、父母について子どもたちとともに考えていくうちに、どうしてもこの目で丸岡さんの故郷が見たくなったのです。ただその衝動だけが、私を突き動かしたのです。実はその道のりが、今回の道のりと同じだったのです。

その後、なんとか丸岡さんの故郷である高州にたどりつくことができ、いろんな巡り合わせの偶然もあって、丸岡さんの奥さんや、また丸岡さんと共に歩んできた村崎さんという方にもお会いすることができました。この村崎さんという方は、実は「猿まわし」を復活させた村崎義正さんの息子さんにあたる人です。この「猿まわし」について、今年から新しくなった「わたしの願い」に文章が載っています。実はある本から私が編集して載せたのですが、この機会に読んでもらえればと思います。丸岡さんの「ふるさと」、そして村崎さんの「日本の伝統芸能『猿まわし』復活」の前編をどうぞご覧ください。

★ ☆☆ ★★★ ☆☆☆☆ ★★★ ☆☆ ★

12月12日(金) 学習会南会場お楽しみ会(18:00～; 南公会堂)

// 第2回板野養護学校交流会(板野養護学校; 西武の潮崎が来るぞ!)

14日(日) 南公会堂まつり(9:00～; 板野南公会堂)

18日(木) 実力テスト

19日(金) 学習会解放クリスマス会

22日(月) 終業式

★ ☆☆ ★★★ ☆☆☆☆ ★★★ ☆☆ ★

ふるさと

丸岡忠雄

“ふるさとをかくす”ことを父は

けもののような鋭さで覚えた

ふるさとをあばかれ

縊死した友がいた

ふるさとを告白し

許婚者に去られた友がいた

吾子よ

お前には

胸張つてふるさとを名のらせたい

瞳をあげ 何のためらいもなく

“これが私のふるさとです”

と名のらせたい

日本の伝統芸能

「猿まわし」復活 前編

村崎義正

高州のルーツをたどる研究のなかで、明治、大正にかけて全盛をきわめた猿まわしの実態が浮かびあがってきた。専門の調教師、百五十人の猿まわしがいたことなどである。明治、大正の時代、全盛をきわめ、全国津々浦々で親しまれた猿まわしのふるさとが、山口県のへんびな片田舎であることを知っていた者は少なかつた。

高州の猿まわしたちは、行く先々で故郷を尋ねられるが、「紀州から来た」「広島から来た」「丹波さき山から来た」など、口から出まかせにうそをついて、故郷のありかをくらしました。猿まわしそのものが賤業として差別されていたが、そのうえ、故郷が、被差別部落だとばれたら、飯の食いあげだと考えたからである。だから、かたくなに故郷のありかをくりましたのである。

猿まわしという伝統芸能は高州だけの所有物ではない。日本の子どもたちの所有物である。猿まわしの芸が始まると、人の輪の中の小さな世界は、もう童話の世界である。千年もの間、日本の子どもたちを童話の世界にいざなつた芸能は、今日に至つて、子どもた

ちの胸の中から奪われてしまった。それは高州の我々が奪つたことになる。実際、保存は不可能でなかつた。芸能形態を近代化し、差別を受けないような水準に引き上げ、たずさわる者へきちつとした生活保障をしてゆけば、日本の子どもたちに童話の世界を保障できたのである。

昭和五十三年一月三日。私は太郎に、

「猿まわしの後継者になれ。お前は、とてつもない幸運を拾うことになる。猿まわしが復活し、日本国民に親しまれ発展すれば、お前はこの道の間

違ひなく第一人者だ。お前と同級の若者が、日本に何十万人といふが、これほどの幸運にめぐり会える者は、めつたにいない。お前は猿まわしの後継者第一号だ。

しかし、他人が造つて与えてくれる座ではない。海のものとも、山のものとも解らない世界に踏み込んでいって、さまざまな障害を克服し、他人が侵し得ない新世界を創造する。これは冒険であり、賭だ。へたをすれば、めざす世界が創造できないで、一生が台無しになる可能性がある。

だから誰もやろうとしない。だが、お前は挑戦しろ。万が一の幸運を手中にするために、ためらうことなく踏み込め。非常に厳しい世界だとい

うことは踏み込むまでもなく解っているが、前途に光明はある。父親として、お前の人生に与える最大の好意であり、プレゼントだ。

人間は闘うために生まれてきた。だから、ロマンのない人生を生きているは無駄なことだ。結果を思い煩わずロマンに生きろ」と、推めた。

「解つた」と、太郎は答えた。

そこで、家族みんなで太郎を囲み、太郎の波瀾に満ちた苦難の旅立ちを祝福して、乾杯した。

「太郎くん、よう見ちよきいよ。これが、猿を立てて歩かせる基本になる山ゆきさすり込みよ。こうして、しつかり、背中から、腰に向かつてさすりおろすんよ。そして、だんだん、猿はしつかり足をふんばるようになるじやろ。背中にそりがはいり。足腰が強うなる。ええ、立ち廻りができるようになる。解つた？」

太郎は呆然と見ていた。ジローはもはや、ふじ子さんのあやつり人形である。なすがままにまかせている。

「太郎くん、やつてごらん」
ふじ子さんが、背中からパチをはずして、太郎に渡した……

後編へつづく